

の歌につけてとて。

およびなき富士の高嶺の月影も袖に落來る露の尾すゝき
一、富士の歌

幾とせか夢にもがなと慕ひつる心の雲のはるゝ富士の根
一、橋爪種重の老て子に後れけるを

橋爪種重、老年にして嫡子におくれ侍りけるを、とぶらひ
侍るとて、短冊に書てつかはしける。

さして思ふ心の水になみだ河渡らぬそでも先ぞ濡れにき
愁緒をとぶらひ侍るとて

とはゞやな思ふもくるし長月に老のね覺の秋のこゝろを
返し

嘆くまじやつるゝまでの思ひぞよ幾ほどもなき老の命を
一、横山正房より

筑州正房より一首到來。

故郷も月も名のみを忍びつゝあかし侘びぬる秋の雨の夜
一、題觀月亭

十九日。野詩一絶題觀月亭。

高林隱々艸堂清。錦葉飄風轉惱情。世上芬華猶昨夢。何如

月下聽松風。

曉梅

月はいま西の海ばらをちこちの梅が香深きあけぼのゝ山
月やどる袖の秋風さよふけて夢路も遠きふるさとのそら

富士

世にふれる比には非じ富士の根の雲より上に積る白ゆき
あらましの雲の衣は裾野にてたゞ袖さむき雪のふじの根

一、懷舊の心を

二十二日。けふは聊こゝろさす日なりければ、懷舊の心
を。

うしやまた幾秋風におくれゐて苔の袂のつゆならぬ身は
昔思ふ夜半にともなふ秋の雨はやがて袂の宿りなりける

一、夢想歌、聖廟へ奉納

二十五日。湯嶋聖廟へ去十二日曉感得の和歌奉納之。基庸
加詞書檀紙に書之。形類にして貼之。縁は杉木地、寸法

は檀紙の恰好にしたがふ也。

八月十二日の曉がた、夢中に下句を感得して上句思惟の程、
夢さめ侍りしが、まださめやらぬに上句をもまふけ侍る歌。

眞帆ひきて霞をわくる朝ぼらけ風の跡ある和歌のうら船

藤原昌興

一、菊池武康夢中の書字

二十七日。昨日武康夢中に清明の二字を、かく書付見侍り
しよし聞えけるまゝ。

清くすむ心の水にうつり來てあくもしらぬ月の影かな
返し

清からぬ心ながらも秋の夜のあけぼのすめる山の端の月
一、百韻二卷返し侍るとて

九月七日。武康・忠張兩吟の百韻二卷返し侍るとて。

眼あればかへすこと葉の花衣春にわかるゝ心地こそすれ
忠張返しとて

かけ浅き老曾の森の朽葉までみる人からに色や添ふらん
一、重陽愛菊

けふごとに山路の露を打はらひ千とせの色をめづる白菊
けふ殊に菊の下水底澄てながれもあえず千代のかげにも
朝まだきさかぬ籬もよしや只けふをせにせむ庭の白ぎく
水邊菊

香をとめてしたゝる菊の露ながら千歳のかげを結ぶ山水

山路菊

露霜を今朝ふみわけてみやま路の秋より外に匂ふしら菊

秋夕

秋はたゞをちの山の端雲消えて薄ぎりまよふゆふ暮の空
一、十三夜の詠

十三夕清光、今夜の愚詠。

菊のうへの露の光にうつろひて名におふ月のかほる秋風
さやけしなもなかの秋の光さへけふにゆづるや長月の影

長月のゆふ山あひの雲晴れて今宵の秋のひかりをぞしる

一、吉川惟足の講談

十九日。今朝吉川惟足と田中平丞を以て被仰遣候。年來神
代卷講談被聞召度、其段一閑迄被仰聞置候處、御用繁多乍
思召御延引被成候。最早來年御參勤候はゞ、御隙を被闕可
被聞召候。乍然程久敷儀に候間、發端一葉成とも惟足講談
の趣被聞召、御歸國被成度候條、來二十一日御隙に候はゞ
可有御出候。二十一日御隙入候はゞ、二十三・四日の内御入
來候様に被思召候。次に其節翁の傳授も御請被成度旨被仰